

筆の里熊野に住んで 友岡案山子

熊野は盆地に位置し、自然豊かな谷里である。自然の中に身を委ね、恵まれた環境で筆を作り、自然を詠んで四季の移ろいを表現出来ることは、幸せなことだと思ふ。

数年前から佐保先生の熱意あるご指導を受け、俳句で人生を豊かにし、俳句で詩情を語ることを教えて頂いた。

これからも俳句を心の泉として、日々暮らしていきたい。

点字打つ手を休めたり花曇

毛組みする筆司の肩に花の散る

蓮華草鋤き込んで行くトラクター

三つほど刻みて作る露の味噌

切符買いこぼるる小銭春の暮

葉桜となりし道行く登校子

サイドミラー後ろの葉桜の映り

鳥はみな樹々に隠れて梅雨に入る

内職の筆の干されて青葉風

小鳥来る道を塞ぎて古物市

《作品鑑賞》

村上正人

友岡案山子さんは、前文にも書かれている通り、佐保光俊先生の指導を素直に学ばれた作風である。筆の里熊野にお住まいで、約千五百人いるといわれる筆職人のおひとりである。このたびの「筆の里熊野に住んで」は、熊野らしさが感じられる事柄を織り交ぜつつ身の回りの季節を作品にされている。

点字打つ手を休めたり花曇

ポランテア、あるいはどなたかのために点字を打たれているのだろうか。集中力が欠かせない作業の手を休めて、ほっとした様子が「花曇」という季語から伝わってくる。

毛組みする筆司の肩に花の散る

筆の穂首をつくるため、筆の種類によって必要な原毛を選んで組み合わせる最初の工程が毛組みである。そんな折、穂やかな風に運ばれてきたのだろうか。筆司の肩に桜の花が散った。

内職の筆の干されて青葉風

軸に詰め込まれた穂首に糊を塗りこませながら、形を整える最終工程を経て、筆を干し終えると、心地よい風が吹いていることにふと気づく。「青葉風」という比較的新しい季語が、筆を作り終えた達成感と相俟って清々しさを感じさせる。

ふじ女 令和3年7月度特別作品

ひろしま美術館 　　ふじ女

ひろしま美術館は「愛とやすらぎのために」をテーマに一九七八年開館、都市部の緑の中にあります。丸いドーム型の本館は原爆ドームを、本館を取り巻く回廊は厳島神社の廻廊をイメージして造られました。入り口にピカソの息から送られたマロニエ、その隣の池に錦鯉(カープ)が泳いでいます。本館は印象派を中心としたフランス近代絵画と日本近代絵画の常設展示。今回の特別展はアーノルドローベル展でした。アーノルドローベルの「がまくんとかえるくん」は、国語の教科書「お手紙」でお馴染みです。

天馬降る夏の白さや美術館

鈍色の石を泳いで錦鯉

夏服のドアマンは目で仕事なり

入り口のチャイム高らか夏来たる

サマードレスすらりと矢印の道へ

黒猫の影行くウインドウ涼し

新緑を過ぎてピカソのいる扉

夏帽子載せて女の絵の前に

ブロンズの少女白夜をなお踊り

ハイヒール響く立夏のリノリウム

《作品鑑賞》

村上正人

ふじ女さんは、ことばの魔術師とも言えるような巧みなことばづかいで、想像力を極きたてる作品を次々と創られる。このたびの「ひろしま美術館」も、持ち前のことばづかいで興味深く、ひろしま美術館関係者をご覧になっても、喜ばれるに違いない作品に仕上がっている。

天馬降る夏の白さや美術館

広島市民病院を向いとす交差点の一角に、館が収蔵するルドンの絵が基となる天馬(ベガサス)のアロンズ像がある。像の後ろの銘板、さらに館自体も白っぽい壁に覆われていて、そんな「夏の白さ」の中にまるで天馬が降り立ったようだ。

夏服のドアマンは目で仕事なり

新型コロナウイルスの感染予防対策をしつつ開館している中、入場者数制限や発熱者の発見はドアマンの重要任務である。「目で仕事」の一言が、緊張感あるドアマンの仕事表現している。

ハイヒール響く立夏のリノリウム

作品を眺め歩くハイヒールの音が静かな館内に響く。床の素材を「リノリウム」と言い切る点が、「立夏」という季節の一時点と呼応して面白い作品となっている。